

「開発の歴史を語る

会所跡」

当初、大和川は北西に流れていました。宝永元年（1704）の大和川付け替えにより、各地で新田開発が行われるようになり、市域でも深野池などがその対象となりました。

市域での新田開発は、付替え前にも明暦元年（1655）に八箇村新田、元禄11年から15年（1698～1702）にかけて尼崎新田などが開発されてきましたが、付け替え後は東本願寺難波別院が、深野池を宝永2年（1705）から正徳3年（1713）の9年をかけて開発し、その開発規模は約3.2平方メートルで市域の約17%にも及びました。

その結果、深野新田・深野南新田などの多くの新田が誕生しましたが、これらの新田経営の出先機関として会所と呼ばれる建物が設置され、その一つに深野南新田・河内屋南新田を管理・運営していた平野屋新田会所がありました。

平野屋新田会所は、深野南新田が正徳5年（1715）、河内屋南新田が享保6年（1721）に平野屋又右衛門に譲渡された際に設置されたもので、その敷地には船着場や千石蔵（米を納めた蔵）

などのほか、広い土間や居室、書院などからなる母屋、さらに瓢箪形の池を持つ庭園などもありました。また、享保13年（1728）に大坂市中より勧請された坐摩神社は、現在では地域の氏神として鎮座しています。

市域および周辺には平野屋新田会所のほか、深野新田会所、毛受会所、東大阪市域の鴻池新田会所などがありました。現在では鴻池新田会所が現存する唯一のものになりました。そのため、教育委員会では後世にも江戸時代における市域の開発の歴史を伝えていくため、平野屋新田会所跡の特徴的な建物である千石蔵跡、道具蔵跡、また船着場跡について保存を図り、広く活用・公開していくことを計画しています。（生涯学習課）



保存・活用される千石蔵跡・道具蔵跡・船着場跡

